



「おひさまとカーネーション」

わたしは昨年度、毎日欠かさず某局の朝の連続テレビ小説を見ていました。

前期に放送された「おひさま」は戦前戦後を生き抜いた女性の生涯が描かれていました。いつも自ら輝いて世界を照らす太陽の「陽子」と名付けられた主人公が、幼くして母を亡くした悲しみにも負けず、長野県安曇野の美しい地に生き、現代の主婦があこがれるような老婦人になるまでのストーリーでした。数々のエピソードは、どれも愛に満ちあふれた美しい物語でした。ただ、嫁姑、夫婦の関係は、わたしの親とほぼ同年代でありながら、その時代を反映していないのではないかと、違和感を感じるところもありました。

後期に放送された「カーネーション」は、登場人物の強烈な個性と関西弁が印象的でした。十和田市にもゆかりの人であるコシノジュンコさんの母、小原糸子さんの人生が描かれています。

女性が主張したり、何かを決めて行うことなど許されなかった時代、「女房、おなごは男にたてつくな」と育てられながらも、糸子は「ドレスを作る」という夢を追い続け、実現していききました。糸子の泥臭さや激しさが、清々しく心に響きました。

今、世界の流れは女性が持っている本当の力を発揮し、社会に生かすことが国を発展させ、世界の平和を守るとして、国連の「女性差別撤廃条約」に基づいた社会変革が行われています。

陽子に母が残した「女の子は太陽よ」という言葉は、明治44年、平塚らいてうが文芸誌「青鞥」で女性たちの自立を呼び掛けた「元始、女性は太陽であった」に由来しているものでしょう。

よく「昔に比べて女は強くなった」と言われるけれど、その強さは本物でしょうか？糸子ほど強く生きることがなかなか難しいかもしれませんが…（笑）

わたしは、男女が共に自立し、支え合い、女性も男性も等しく生きられる社会を切望しています。

著者紹介



高森 修子さん
1947年生まれ。2001年よ
り、I女性会議十和田支
部支部長を務める。自ら
が生きられる社会を
日々活動して

ホットな一句

ハードルを2人で越えた深い皺
ゆっパル編集委員*木村奈生美

問 総務課広報男女参画係 ☎ 6702

とわだの文化財 2 ～十和田市の文化財を紹介するコーナーです

問 生涯学習課 ☎ 2313

いちりづか 一里塚

一里塚は江戸時代、徳川幕府の街道の整備の際に築造されたもので、街道の両側に塚を一里ごとに作り、旅人の里程の目安や休憩場所として利用されていた。※里程…里で表した距離のこと。



間遠地の一里塚



一本木の一里塚

一里塚は、一六〇四年、徳川家康の命令により、大久保長安らが東海道・中山道・奥羽街道などの諸街道整備を行った際に築造したのが起源と言われる。

江戸日本橋を起点に、一里（約四km）ごとに塚を築いたもので、形態は、街道を挟んで二基の塚があることが一般的である。塚の大きさは底面で直径五間（約九m）、高さ一間（約一・八m）に定められており、その上に標識を建て、榎木や松などを植えて旅人の休憩場所などにも利用されていた。

市内には四カ所残されており、北から池ノ平・間遠地・一本木・伝法寺地区にある。市内に残されている最古の絵図「寛文三本木村絵図」（一六六五年）に記されていることから、今から約三四〇年前に築造されたものであることがわかる。池ノ平と伝法寺の一里塚は、一対二基と当時の面影を残しており、県史跡に指定されている。残る二カ所は、国道建設や用水路敷設に伴って一方が壊されており、各一基のみ残されている。

それ以前の道標は「吾妻鏡」によると、平安時代末期に奥州藤原氏が白河の関（福島）から外ヶ浜（青森）まで卒塔婆の面に金色の阿弥陀像を描いたものを建て、里程を表示したと、記されている。

（文責：市文化財保護協会）